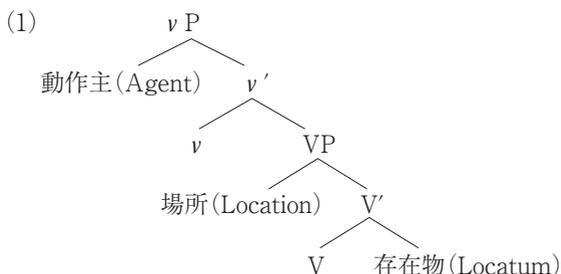


# 主題階層と受動文の構造

藤 本 滋 之

## 0. はじめに

同じ主題役を担う項は、基底構造において同じ統語構造上の位置に生成されるという Baker (1988) の UTAH (uniformity of theta assignment hypothesis) を仮定すると、構文の基底構造は主題役によって決まることになる。UTAH を前提とし、主題役を〈動作主〉 (Agent)、〈場所〉 (Location)、〈存在物〉 (Locatum) の三つのマクロな主題役に限定し、Jackendoff (1972) や Grimshaw (1990) の主題階層を VP-shell (Larson 1988, Hale and Keyser 1993) に組み込むことによって諸構文の派生を説明したものに、加賀 (2001)、Kaga (2007) がある。これに基づくと、三つのマクロな主題役をすべて有する文の基底構造は次のようになる。



上記の図のように、動詞句は VP-shell 構造を成しており、まず〈存在物〉 (Locatum) が下位の動詞 V と併合し、次に〈場所〉 (Location) が併合し、最後に〈動作主〉 (Agent) が併合する。マクロな主題役 (semantic macroroles) (van Valin 1990, 1999) の〈存在物〉には、移動、存在、出現するもの等が該

当する。マクロな〈場所〉役には移動の到達点 (Goal)、起点 (Source)、経路 (Path) や存在や出現の場所等が該当する。マクロな〈動作主〉には原因 (Cause) も含まれる。

上記(1)のように、三つの主題役が全部揃った構文の代表として、次のような場所格交替構文 (locative alternation constructions) や与格交替構文 (dative alternation constructions) がある。

- (2) a. John loaded the wagon with the hay.  
 b. John loaded the hay on the wagon.
- (3) a. Jane sent him some books.  
 b. Jane sent some books to him.

(2a)と(3a)は、ここでは詳細を省略するが、「動作主〉場所〉存在物」という主題階層通りに派生した文と言える。他方、(2b)と(3b)は、〈存在物〉である the hay と some books が、〈場所〉である on the wagon と to him の右側、つまり文末を基底位置とするものの、目的格照合のために動詞の直後の位置に移動して派生したと分析される。<sup>1</sup>

文の基底構造が主題階層によって決まることを前提とすると、文法操作によって派生する受動文の基底構造も、上記(1)と同様に考えるのが自然な帰結であろう。上記(2)の受動文は(4)のようになる。

- (4) a. The wagon was loaded with the hay by John.  
 b. The hay was loaded on the wagon by John.

主題階層が基底構造を規定することを前提とすると、受動文(4)の基底構造は次のようになるはずである。

<sup>1</sup>「移動」の中味は「内的併合」(internal merge)を想定しているが、本稿では便宜上「移動」を用いることにする。

- (5) a. \*By John was loaded the wagon with the hay.  
 b. \*By John was loaded on the wagon the hay.

(5)のように、主題階層の最上位に位置する<動作主>を担う *by*-phrase が<場所>や<存在物>を担う句よりも先に生じるはずであるが、言うまでもなく(5)のような語順がそのまま派生することはないし、どのようにして(5)から(4)が派生するのか不明である。

本稿では、主題階層に基づく基底構造からどのようにして(4)のような受動文が派生されるかを考察する。1節では、受動文を派生する原理として「密輸出 smuggling」(Collins 2005)を概観する。2節では、三つのマクロな主題役が揃った構文の代表として場所格交替構文の派生構造を考察する。

## 1. 最小性原理(minimality)と密輸出(smuggling)

本節では、UTAHを前提とする受動文の派生を考察する。

受動文の基底構造も主題階層に従うと仮定し、VP内主語仮説に従うと、マクロな主題役としての<動作主>はvP指定部に併合される。受動文では、<動作主>よりも階層が低い<場所>や<存在物>が<動作主>を越えてTP指定部に移動することになるので、最小性原理(Minimality Principle)に違反することになる。これは、移動先の選択の曖昧さを規制するRizzi(1990)のRelativized Minimalityを起源とし、Hornstein(2001, 2009)が移動元選択を決定する原理へと転換した原理である。以下は、本原理を移動に限定せず、さらには言語にも限定されない普遍性の高い原理として捉えている中島(2016: 142)の定義である。

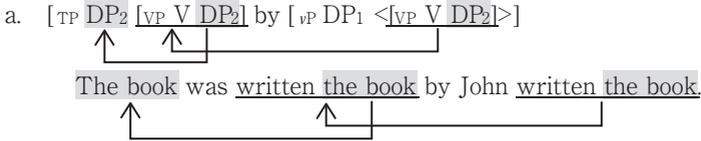
- (6) 最小性原理：次の形状において、 $X^1$  は、 $X^3$  と同じ性質である  $X^2$  を差し置いて  $X^3$  と関係することはできない； $\dots X^1 \dots X^2 \dots X^3 \dots$

ここで問題にしている受動文の派生構造において、 $X^1$  はTP指定部つまり受動文の主語位置、 $X^2$  はvP指定部にある<動作主>、 $X^3$  はVP内にある<場所>

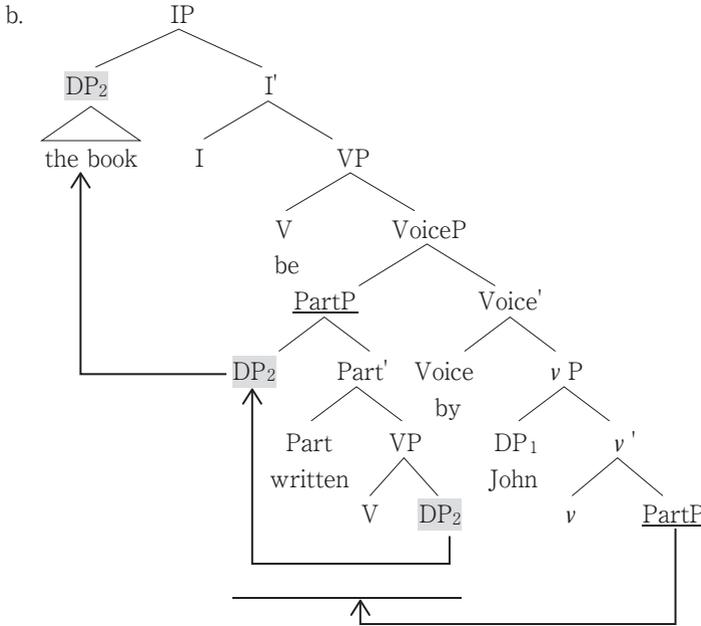
あるいは<存在物>を指す。

受動文派生における最小性原理違反、つまり目的語名詞句が文の主語位置に移動する際、目的語名詞句よりも主語位置に近い *vP* 指定部にある<動作主>を越えてしまう違反を回避するため、Collins (2005) が提唱し Belletti and Rizzi (2013) が支持したのが、次のような smuggling (密輸出) という移動操作である。

(7) Smuggling (密輸出)



(Belletti and Rizzi 2013: 120)



(Collins 2005: 90)

まず(7a)を見よう。他動詞と非能格動詞の動詞句は  $vP$  と  $VP$  から成っていて、内側の動詞句  $VP$  は、その外側の  $vP$  へ付加される。 $vP$  内の  $VP$  を  $vP$  外に持ち出すこの操作を Collins (2005) は *smuggling* (密輸出) と呼ぶ。 $vP$  外に持ち出された  $VP$  は、 $vP$  指定部にある  $DP_1$  よりも高い位置にあるので、その補部にある  $DP_2$  が  $TP$  指定部へ移動する際、 $DP_1$  を飛び越す、すなわち(6)の最小性原理に違反して移動することはない。

次に(7b)を見よう。Collins (2005) が提案する動詞句の構造の特徴は、 $vP$  と  $VP$  の間に過去分詞を主要部とする *Participle Phrase* (以後 *PartP* と表記；(7b)でもそのように表示) が存在することである。<sup>2</sup> この範疇が、 $vP$  を補部とする *Voice Phrase* の指定部に移動する際、 $V$  の補部である  $DP_2$  も伴って移動するので、 $DP_2$  が  $DP_1$  よりも  $IP$  ((7a)では  $TP$ ) の指定部に近くなり、最小性原理(6)に違反することなく移動できる。

(7b)の分析で問題になるのは、*phase* (Chomsky 2000, 2001) の定義と *PartP* の移動のタイミングである。Chomsky (2001) の定義によると、外項を欠く受動文や非対格文の  $v$  は (strong) *phase* ではない。これに対し、Collins (2005) の分析(7b)では、受動文の  $v$  が外項を持つので *phase* ということになり、 $v$  が併合した時点で  $v$  の補部である *PartP* は *Spell-Out* され移動の機会を失する。そこで Collins (2005: 98) は、受動文の *phase* は  $v$  でなく  $v$  を補部とする *Voice Phrase* だと考えた。その主要部が *by* であり、*by* は前置詞でなく *for* と同じように補文標識のような機能を持つと考えている。そうすると、*phase head* である *by* が併合すると同時に *PartP* が *Voice Phrase* 指定部に移動し、補部の  $vP$  が *Spell-Out* される。

もう一つの問題は対格の照合である。Chomsky (2000, 2001) によると、能

<sup>2</sup> *VP-shell* を構成する上下二つの動詞句の間に特定の範疇を想定する他の分析の代表として、Koizumi(1993)の "split VP" と Travis(2010)の "inner aspect" がある。前者における中間の範疇は *AgroP* (*Object Agreement Phrase*)、後者においては *AspP* (*Aspect Phrase*) である。Collins(2005)において、下位の動詞  $V$  の補部位置にある  $DP_2$  が  $VP$  を補部とする *PartP* の指定部に移動する構造分析は Koizumi(1993)と共通している。また、過去分詞は完了というアスペクトを表す点で、Collins の *Participle Phrase* は意味的に Travis(2010)の *Aspect Phrase* と共通する。

動文の場合、目的語 DP の格照合は  $v$  との間的一致操作 (Agree) によって行われる。<sup>3</sup> これに対し受動文では、格照合は Voice Phrase 主要部である by により  $v$ P 指定部の外項に対して行われると Collins (2005: 96) は考えている。<sup>4</sup> 他方、V の補部にある内項は、PartP 指定部を経由し IP 指定部で主格照合を受ける。

対格照合に関するさらなる問題は、PartP の存在である。Koizumi (1993) や Travis (2010) では、VP-shell の中間にある機能範疇が目的語名詞句の格照合を行うと考えている。これでは、能動文と受動文の対格照合の違いを説明できない。能動・受動の違いに関係なく、下位の動詞 V の補部に併合される内項の DP が、PartP 指定部で格照合を受けることになるからである。これは phase 理論のもとで、Chomsky (2008) の素性継承 (feature inheritance) を仮定すると次のように説明されよう。すなわち、能動文の場合、phase である  $v$  が格照合にかかわる素性をもち、それが補部の PartP 主要部に継承され、内項の DP は PartP 指定部で対格照合を受ける。完了形の能動文の目的語はこのようにして格照合を受ける。他方、受動文の場合、 $v$  は phase ではないため、 $v$  が併合しても PartP に格照合の能力は生じない。次に Voice Phrase 主要部 (by) が併合された際、格照合は  $v$ P 指定部にある外項に対して行われ、PartP はその内部で格照合が行われなまま Voice Phrase 指定部に移動する。

## 2. 三つの主題役を持つ受動文：場所格交替構文の受動文

本節では、前節で概観した smuggling という操作を前提として、三つのマクロな主題役が揃った構文の代表として、場所格交替構文の受動文の派生構造を

<sup>3</sup> 格照合は、Chomsky (2000, 2001) に従い、probe(ここでは phase head である  $v$ ) の持つ解釈不可能な  $\phi$  素性 (u $\phi$ ) が、goal(ここでは V の補部にある DP) の持つ解釈可能な  $\phi$  素性との一致 (Agree) により値 (数・人称) を付与され削除されると同時に、goal の持つ解釈不可能な格素性 (uCase) に格の値 (ここでは対格) が付与され削除される操作を仮定しているが、本稿ではそのような厳密な操作のメカニズムには立ち入らず「格照合」とだけ称することにする。

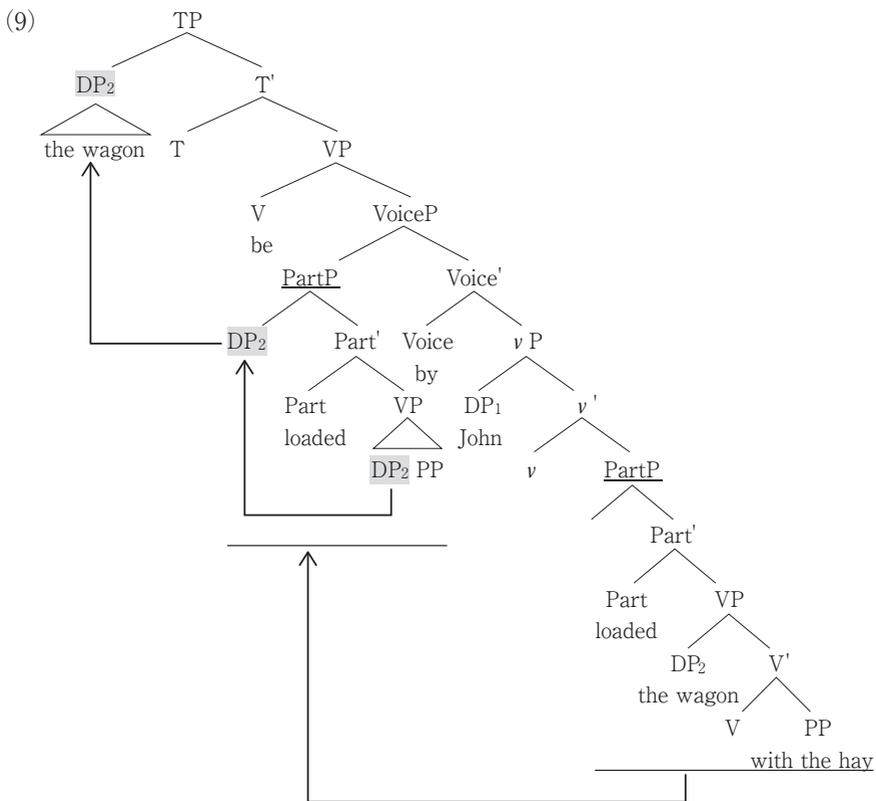
<sup>4</sup> この分析は、対格照合が斜格照合の特別な場合と主張する Hoekstra (1996) の考え方に通じると、Collins (2005: 96) は脚注 11 で付記している。

考察する。

下記は、先に挙げた場所格交替構文の受動文の例(4)である。これを用いて考察する。

- (8) a. The wagon was loaded with the hay by John.
- b. The hay was loaded on the wagon by John.

(8a)について(7b)の smuggling 操作を適用すると(9)のようになる。



(9)と(7b)の違いは、動詞 loaded が内項を二つ取ることである。内項が二つあるとき、Larson (1988) が提案した二重目的語構文の構造を適用し、一方は下位動詞 V の補部、他方は下位動詞 V の指定部に併合 (Merge) すると仮定する。主題階層が下位の〈存在物〉 (the hay) が補部、上位の〈場所〉 (the wagon) が指定部に併合する。<sup>5</sup> その後は(7b)と同様である。次に PartP 主要部である過去分詞 (loaded) が併合し、さらに上位動詞 *v* が併合し、指定部に外項の DP<sub>1</sub> (John) が併合する。次に phase head である Voice (by) が併合すると、DP<sub>1</sub> の格の値が決まり、PartP が Voice Phrase 指定部に移動する。それと同時に、DP<sub>2</sub> (the wagon) が PartP 指定部に移動し、その主要部のもつ affectedness にかかわる素性を照合する (cf. Travis 2010)。<sup>6</sup> 最後に DP<sub>2</sub> が TP 指定部に移動し  $\phi$  素性を照合し格照合を受け主格を与えられる。<sup>7</sup>

(9)の分析の問題は、次の語順を予測できないことである。(8a)=(10a)とは異なり *by*-phrase が動詞の直後に生じる語順(10b)も可能である。

- (10) a. The wagon was loaded with the hay by John. = (8a)  
 b. The wagon was loaded by John with the hay.

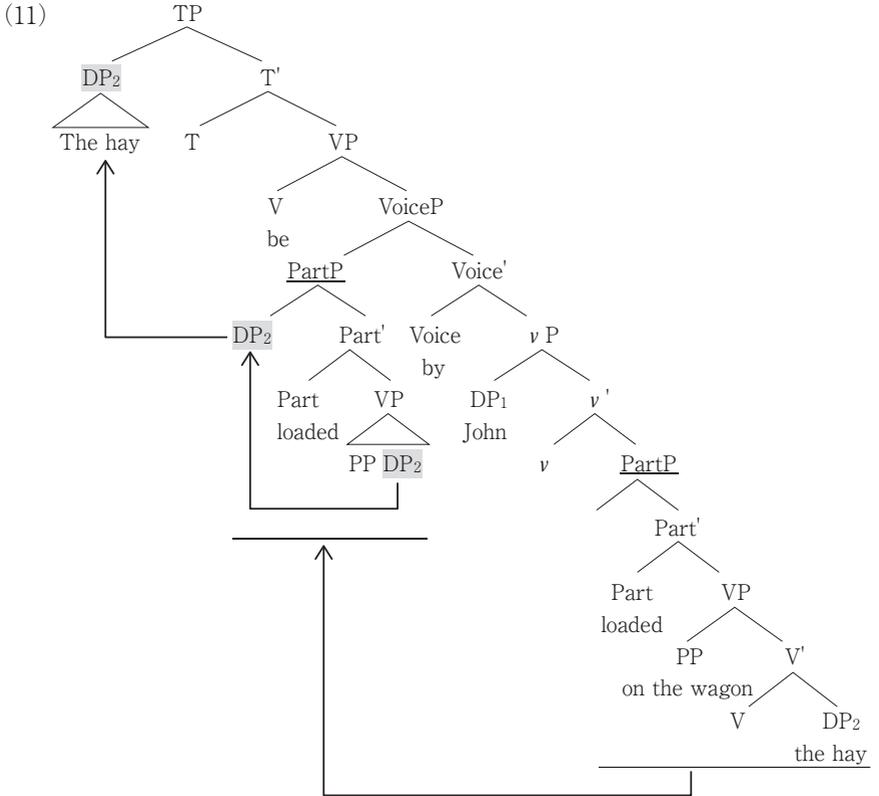
PartP は phase というわけではないが、ここでは、補部の VP を Voice Phrase 指定部への移動先で Spell-Out するか移動元で Spell-Out するかが随意的なためと考えておきたい。前者なら(8a)=(10a)が派生し、後者なら(10b)が派生する。

次に(8b)の派生を考察する。(8b)について(7b)の smuggling の操作を仮定すると次のようになる。

<sup>5</sup> Larson(1988)の二重目的語構文分析では、その基底構造として前置詞付き与格構文が想定されており、場所役を担う PP が先に下位動詞の補部に併合し、次に存在物役を担う DP が下位動詞指定部に併合する。これとは逆に本稿では、主題階層に従い、存在物役が先に併合し、次に場所役が併合するものとする。

<sup>6</sup> 同一 phase 内の移動は、phase head が併合された瞬間に同時に起こると考えられている(Chomsky 2008)。

<sup>7</sup> DP<sub>2</sub> の TP 指定部への移動を駆動するのは T の持つ EPP 素性(Chomsky 2000, 2001; Chomsky 2007, 2008 では phase である C から継承した edge feature)である。あるいは、labeling algorithm(Chomsky 2007, 2008)を仮定すると、DP<sub>2</sub> は Agree する相手 (probe)の素性(ここでは  $\phi$  素性)の値が得られるまで移動することになる。本稿の樹形図における範疇標示は、labeling に基づくものではなく、X-bar 理論におけるものを使用している。



上記(11)の(9)との違いは、<場所> (the wagon) と<存在物> (the hay) の範疇だけである。すなわち前者がPP、後者がDPである。(11)でも(9)と同様に、PartPがVoice Phrase 指定部に移動する際、smugglingにより<場所>と<存在物>の両方が<動作主> (John) を越えて移動する。このとき同時にDP<sub>2</sub> (the hay) がPartP 指定部に移動して affectedness にかかわる素性を照合する。最後にDP<sub>2</sub>がTP 指定部に移動しφ素性を照合し格照合を受け主格を与えられる。<sup>8</sup>

<sup>8</sup> (11)の場合にも(9)と同様の問題が生じる。(8b)=(i)に対して(ii)の語順も可能である。

i) The hay was loaded on the wagon by John. = (8b)

ii) The hay was loaded by John on the wagon.

UTAH を前提とし、smuggling を仮定する以上のような受動文の構造分析は、(13)のような語順の受動文の生起と、(12)と(13)の非対称を合理的に説明する。場所格交替構文の受動文は、(8a)=(12a)のタイプでは、これ以外の語順が不可能であるが、(8b)=(13a)のタイプは(13b-d)の語順も可能である。<sup>9</sup>

- (12) a. The wagon was loaded with the hay by John. = (8a)  
 b.\*With the hay was loaded the wagon by John.  
 c.\*The wagon was with the hay loaded by John.  
 d.\*With the hay was the wagon loaded by John.
- (13) a. The hay was loaded on the wagon by John. = (8b)  
 b. On the wagon was loaded the hay by John.  
 c. The hay was on the wagon loaded by John.  
 d. On the wagon was the hay loaded by John.

(12)と(13)の非対称は、以下のように考えることができよう。

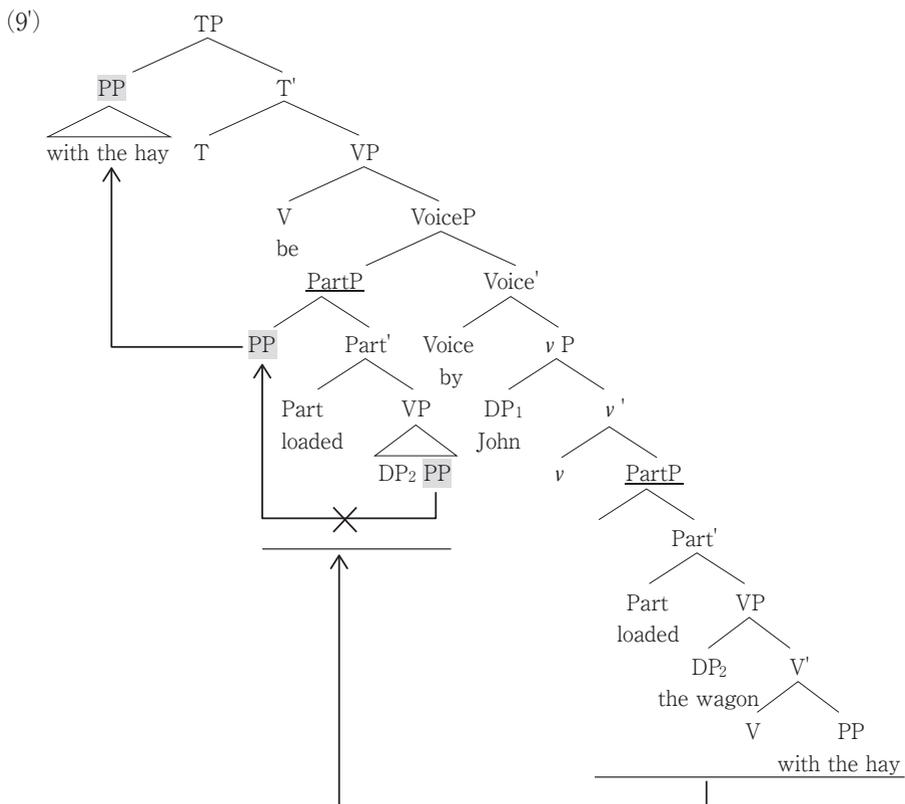
(12b)と(13b)の派生を図示すると、それぞれ下記(9)と(11')ようになる。いずれも、phase headであるVoice主要部が併合すると、PartP内でDP<sub>2</sub>の代わりにPPが指定部に移動する。それと同時にPartP全体がVoice Phrase指定部に移動する。Travis (2010)におけるAspect PhraseがPartPに対応すると仮定すると、PartPはaffectednessにかかわる素性と、VP内にあるDPの格の値を決定する $\phi$ 素性を有する。能動文では、phase headであるvが併合すると、格の値を決める素性がPartP主要部に継承され、両素性を照合できる目的語DPがPartP指定部に移動する。しかしながら受動文では、格の値を決める素性をphase headであるVoice主要部が保持しPartP主要部には継承されないため、

---

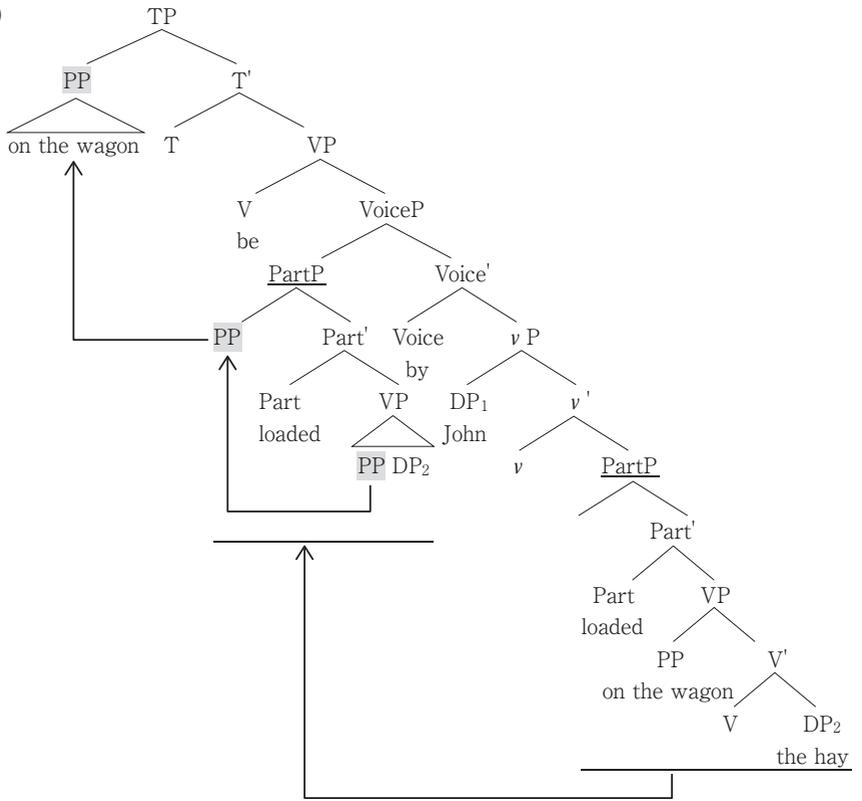
ここでも(10)の場合と同様に、補部のVPをVoice Phrase指定部への移動先でSpell-Outするか移動元でSpell-Outするか随意的なためと考えておくことにする。前者なら(i)=(8b)が派生し、後者なら(ii)が派生する。

<sup>9</sup> Cynthia L. Daugherty氏にインフォーマント・チェックをお願いした。深く感謝の意を表する。

PartP が持つ素性は affectedness を決める素性のみとなる。



(11')



ここで加賀(2001:144)が仮定する構造的具現化原則、すなわち単純なく場所>項は前置詞句として具現化し、影響を受けた(affected)<場所>項は名詞句として具現化するという原則を仮定する。「影響を受けた(affected)」とは状態が変化するということであり、(12a)の例では、主語 DP (the wagon) が干草を満載した状態に変化するということである。(12a)でこの解釈が得られるのは、図(9)において、DP<sub>2</sub> (the wagon) が PartP 指定部に移動し affectedness にかかわる素性を照合したためと分析できる。他方、(13a-d)では、DP (the hay) に位置変化はあるが状態変化はない。<sup>10</sup> もちろん PP (on the wagon) にも状態変化はない。両者とも unaffected であるから、どちらも PartP 指定部に移動できる。

以上を踏まえると、(12a, b)と(13a, b)の非対称は次のようになる。(12)では<場所>名詞句 (the wagon) は affected であるが PP (with the hay) は unaffected である。したがって、DP<sub>2</sub> (the wagon) が PartP 指定部に移動した後さらに TP 指定部に移動して派生した(12a)は容認されるが、PP (with the hay) が同様に移動して派生した(12b)は容認されない。affected な DP<sub>2</sub> (the wagon) を差し置いて unaffected な PP (with the hay) が PartP 指定部に移動した時点で派生が破綻する。図(9)の×印はそのことを示している。他方(13)では、DP<sub>2</sub> (the hay) も PP (on the wagon) も状態変化を受けない。双方が unaffected であるから、DP<sub>2</sub> (the hay) が PartP 指定部に移動した後さらに TP 指定部に移動して派生した(13a)も、PP (on the wagon) が同様に移動して派生した(13b)も容認される。

次に、(12c)と(13c)の容認度の差の理由は次のようになる。(12c)は、PP (with the hay) が PartP 指定部に移動した後、DP<sub>2</sub> (the wagon) が TP 指定部に移動して派生したものである。affected な名詞句 (the wagon) を差し置いて unaffected な PP が PartP 指定部に移動した時点で派生が破綻している。他方、(13c)は PP (on the wagon) が PartP 指定部に移動した後、DP<sub>2</sub> (the hay) が

<sup>10</sup> Jackendoff(1990)は位置変化(移動)する<存在物>を affected と考えているが、加賀(2001)は否定する議論を展開している。本稿は加賀(2001)に従う。

TP 指定部に移動している。(12c)とは異なり DP、PP 双方とも unaffected であるから、PP の PartP 指定部への移動に問題はない。

(12d)と(13d)はいずれも、DP (それぞれ the wagon と the hay) が PartP 指定部に移動した後 PP (それぞれ with the hay と on the wagon) が TP 指定部に移動したものである。DP の PartP 指定部への移動は、どちらも問題ない。(12d) の DP (the wagon) は affected であり、(13d) の DP (the hay) は unaffected であるが PP (on the wagon) も unaffected であり、どちらが PartP 指定部に移動してもよい。次に PP が TP 指定部に移動する際に差が生じる。TP 主要部には Rizzi (2006) が [+aboutness] と称した、ある種のトピック素性があり、TP 指定部に移動する要素はそれを照合できるものでなければならぬ。<sup>11</sup> (12d) のような状態変化文においては、状態変化が生じる場所を表す DP (the wagon) と状態を表す PP (with the hay) では、前者にその資格がある。したがって、PartP 指定部にある DP が TP 指定部に移動して派生する (12a) は問題ないが、PP が移動した (12d) は派生が破綻する。他方、(13d) のような位置変化文においては、位置変化するものを表す DP と変化した位置を表す PP (on the wagon) は T の持つトピック素性を照合する資格に関して対等である。したがって、PartP 指定部にある DP が TP 指定部に移動して派生する (13a) と同様、PP が移動した (13d) も容認される。なお、(13d) では PartP 指定部に残る DP の格照合は Agree によって行われる。

受動文の派生にトピック素性が関与することは、次のデータも示唆している。

- (14) a. ??Hay was loaded on the wagon by John.  
 b. ??Hay was on the wagon loaded by John.

上記のデータは、場所格交替構文の受動文の主語 DP が定名詞句でなければな

<sup>11</sup> Rizzi (2006: 122) は、トピックにかかわる素性として [aboutness] と [d-linking] の二つを区別し、Topic 主要部は [+aboutness] と [+d-linking] を有するのに対し、T 主要部は [+aboutness] であるが [-d-linking] であると考えている。aboutness は単文中におけるトピック性を指し、d-linking は discourse におけるトピックを指している。

らないことを示している。定性 (definiteness) がトピック性と連動していることは言うまでもない。

以上の議論は、(13)の受動文に見られる語順の多様性が、(11)/(11')のような構造と smuggling による移動を仮定することによって、自然に説明できることを明らかにしたと思われる。

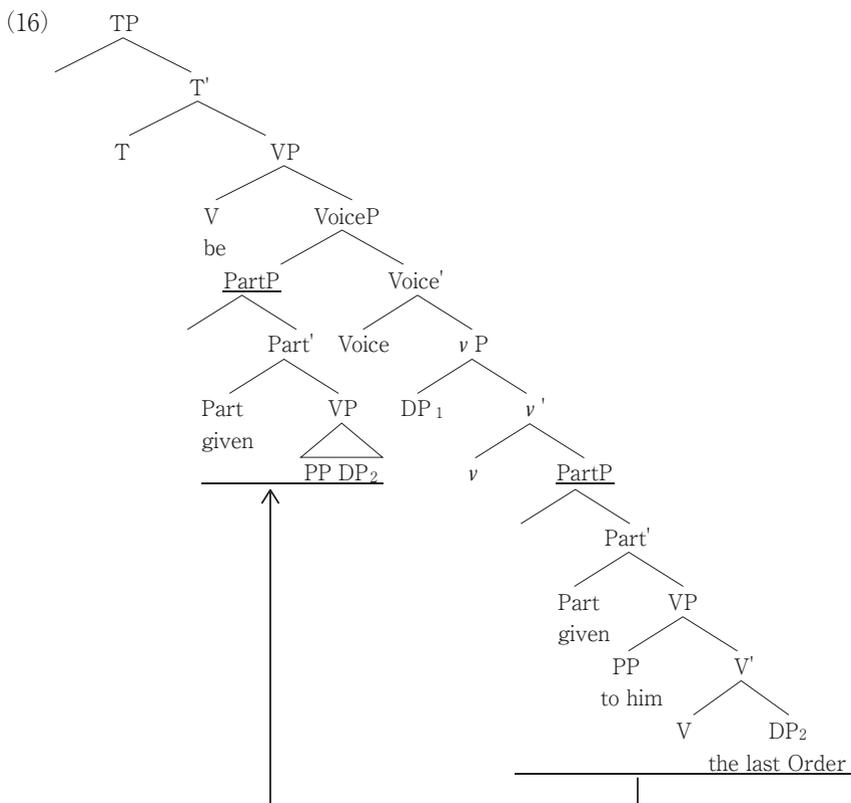
(13)のような受動文における語順の多様性は、次のような前置詞付き与格構文の受動文にも観察される。

- (15) a. The last Order she received was given to her in December 1952.  
 b. To him were given dominion, glory and a kingdom.<sup>12</sup>  
 c. i) The last Order she received was to her given in December 1952.  
     (<http://theenchantedmanor.com/british-royal-family-orders/>)  
     ii) The said manor was to her given by writing under Seal of the said earl.  
     (<https://www.british-history.ac.uk/wells-mss/vol1/pp454-465>)  
 d. To him were dominion, glory and a kingdom given.

(15)の語順の交替も、(16)のような構造と smuggling を仮定することで自然に予測できる。

<sup>12</sup> (15b)は次の実例に筆者が変更を加えインフォーマント・チェックしたものである。

To him was given dominion, glory and a kingdom. (<https://biblehub.com/daniel/7-14.htm>)



(16)において、 $DP_2$ がPartP指定部に移動した後TP指定部に移動すれば(15a)が派生し、PPがPartP指定部に移動した後TP指定部に移動すれば(15b)が派生する。 $DP_2$ の格照合はAgreeによる。PPがPartP指定部に移動した後、 $DP_2$ がTP指定部に移動すると(15c)が派生する。先に $DP_2$ がPartP指定部に移動した後、PPがTP指定部に移動すると(15d)が派生する。

以上、本節では、三つのマクロな主題役が揃った場所格交替構文と前置詞付き与格構文の受動文の派生を考察した。

### 3. 終わりに

本稿では、構文の基底構造が主題構造によって決まるという UTAH (Baker 1988) を前提とし、〈動作主〉、〈場所〉、〈存在物〉という三つのマクロな主題役 (van Valin 1999) を持つ場所格交替構文の受動文の構造と派生を考察した。受動文もその基底構造は「動作主>場所>存在物」という主題階層 (Jackendoff 1972、Grimshaw 1990) を反映すると仮定すると、その主語と *by*-phrase の主題階層が逆転する派生のメカニズムが問題となる。本稿では、Collins (2005) が提案し Belletti and Rizzi (2013) が支持した「密貿易」(smuggling) を採用することで、受動文における主題階層の逆転と、三つの主題役を有する受動文における語順の多様性が自然に説明できることを論じた。

### 参考文献

- Baker, Mark (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*, University of Chicago Press, Chicago.
- Belletti, Adriana and Luigi Rizzi (2013) "Ways of Avoiding Intervention: Some Thoughts on the Development of Object Relatives, Passive, and Control," *Rich Languages from Poor Inputs*, ed. by Massimo Piattelli-Palmarini and Robert C. Berwick, 115-126, Oxford University Press, Oxford.
- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Chomsky, Noam (2007) "Approaching UG from Below," *Interface + Recursion = Language? Chomsky's Minimalism and the View from Syntax-Semantics*, ed. by Uli Sauerland and Hans-Martin Gartner, 1-29, Mouton de Gruyter, Berlin and New York.
- Chomsky, Noam (2008) "On Phases," *Functional Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizarreta, 133-166, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Collins, Chris (2005) "A Smuggling Approach to Passive in English," *Syntax* 8, 81-120.
- Grimshaw, Jane (1990) *Argument Structure*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Hale, Kenneth and Samuel Keyser (1993) "On Argument Structure and the Lexical

- Expression of Syntactic Relations,” *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, ed. by Kenneth Hale and Samuel Keyser, 53-109, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Hoekstra, Teun (1996) “The Active-passive Configuration,” *Configurations: Essays on Structure and Interpretation*, ed. by Anna-Maria Di Sciullo, 41-50, Cascadilla Press, Somerville, Mass.
- Hornstein, Norbert (2001) *Move! A Minimalist Theory of Construal*, Blackwell, Oxford.
- Hornstein, Norbert (2009) *A Theory of Syntax: Minimal Operation and Universal Grammar*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Jackendoff, Ray (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structures*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- 加賀信広 (2001) 「意味役割と英語の構文」 米山三明・加賀信広 『語の意味と意味役割』 研究社、東京
- Kaga, Nobuhiro (2007) *Thematic Structure: A Theory of Argument Linking and Comparative Syntax*, Kaitakusha, Tokyo.
- Koizumi, Masatoshi (1993) “Object Agreement Phrases and the Split VP Hypothesis,” *MIT Working Papers in Linguistics* 18, 99-148.
- Larson, Richard (1988) “On the Double Object Construction,” *Linguistic Inquiry* 19, 335-391.
- 中島平三 (2016) 『鳥の眺望 補文標識選択と鳥の制約と受動化』 研究社、東京
- Rizzi, Luigi (1990) *Relativized Minimality*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Rizzi, Luigi (2006) “On the Form and Chains: Criterial Positions and ECP Effects,” *WH-Movement Moving On*, ed. by Lisa L.-S. Cheng and Norbert Corver, 97-133, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Travis, Lisa (2010) *Inner Aspect: The Articulation of VP*, Springer, Dordrecht.
- van Valin, Robert, Jr. (1990) “Semantic Parameters of Split Intransitivity,” *Language* 66, 221-260.
- van Valin, Robert, Jr. (1999) “Generalized Semantic Roles and the Syntax-semantics Interface,” *Empirical Issues in Formal Syntax and Semantics* 2, ed. by F. Corblin, C. Dobrovie-Sorin and J.-M. Marandin, 373-389, Thesus, The Hague.